

「ブラジルのネグリチュード (*Negritude brasileira*)」から考える 国家と社会—北東部バイーア州都サルヴァドールを訪ねて

日本文化学部歴史文化学科准教授
川畑博昭

昨年度の本誌に掲載した紀行文で、私は自分の専門である比較憲法学の「主旋律」としてのペルーに対して、ブラジルはこれを常に裏から刺激するいわば「副旋律」であり、今後もそうであり続けるだろうと述べ、「ブラジルの人種の垣塙」に言及した¹。ここでブラジルの文脈における「人種」とは、とりわけ植民地時代にアフリカからの奴隷としてブラジルに強制的に連行され、総じて「アフロ系ブラジル人 (Afro - Brasileiros)」といわれる人々のことを指す。そして彼らの「ブラジルのネグリチュード (*Negritude brasileira*)」にこそ、この国の社会を特徴的に描き出す重要な文化的・人種的ヒントが潜んでいるのではないかと考える。「特徴的に」とは、アフロ系ブラジル人のアイデンティティに関わる内面的なことのみを指してのことではなく、彼らを取り巻く外的環境という意味でのブラジル社会の総体のことである。

いつかはこの「アフロ・ブラジル文化」の空気を直に肌で感じたいと思っていた私は、2009年12月13日から29日までの約2週間のブラジル・ペルー研究調査期間中のわず

か3日間ではあったが、ブラジル北東部 (Nordeste) のバイーア州都サルヴァドールに滞在した。あいにくの体調不良によって、当初予定していた活動が十全に展開できなかった点が悔やまれるが、それでも、彼の地で刺激を受け、考える素材を得たあれこれをわずかにでも綴っておくことに、フィールドノートとしていかにほどの意味はあるかと考えた。本稿ではこの滞在を振り返りつつ、冒頭で示した「主 - 副」の旋律の位置関係を念頭に置きつつ、比較文化的な構えで、ラテンアメリカの国家と社会について改めて思いをめぐらしてみたい。



バーハ要塞・灯台

¹ 拙稿「2008年ブラジル紀行 - 私の中の静かな“ブラジル・ブーム”」本誌2号、63～64頁。

大都会サンパウロの喧騒から解き放たれて降り立ったサルヴァドールは、真っ青な青空が一面に広がり、空港から十数キロ先には広大な大西洋が存在することを匂わせていた。空港前の路上ではさっそく、揚げたての名物アカラジェ (acarajé)²を売るバイアーナ (バイーア地方の黒人女性) が目に入り、人々が話すポルトガル語にバイーア独特のイントネーションが感じられるや、もはや完全にトロピカルな気分に取り込まれていた。そこには、私がこの地に比すれば長く滞在してきたサンパウロ州やパラナ州といったブラジル南部地方とは「完全に異なるブラジル」の存在があった。空港から宿までの整然とした(?)市街地を通るタクシーのなかで見かけるほぼ全ての人々が「アフロ系ブラジル人」であると思われたが、よくいわれるように、ここでの「アフロ系ブラジル人」とは、厳密には、白人と黒人の混血 (ムラート) の人々であろう³。

到着した夜は現地の人々も大勢集まるといふ郷土料理レストラン「イマエンジャ (Yemanjá)」へ繰り出すと、バイアーナ独特の衣装を纏ったウェイトレスが親切に対応してくれるなか、バイーアの最も典型的な料理であるムケーカ (Muqueca de camarão⁴) を食した。これは旅の疲れを癒

² 黒目豆の粉で作ったパンをデンド (椰子) 油で揚げたものを半分にし、そのなかに干し海老やココナツミルクなどのペーストをはさんであるもの。日本人には結構「重たい」食べ物である。

³ なお本稿の主題を考えるにあたり忘れられてはならないのが、ブラジル全人口の約55%が白人であるという人種構成の実態である。さしあたり、参照、田所清克『ブラジル学への誘い その民族と文化の原点を求めて』(世界思想社、2001年)、11頁以下。

⁴ エビのブイヤベースである。

す“あっさり系”の料理には程遠く、ココナツミルクをふんだんに使用した“ガッツリ系”の料理である。これがまたいかにも、「ブラジル北東部らしさ＝アフロ系ブラジル人＝ブラジルのネグリチュード」を強く印象づけてもいた。

今回の滞在では徹底的に街を練り歩くつもりでいたものの、それが十分に叶わなかったことから、せめて「観光客」程度のことはしようと、現地の史跡めぐりツアーに参加した。オランダ軍が攻めてきた際の軍事的砦となったパーハ要塞と灯台 (Forte e Farol da Barra) から見事なトドス・オス・サントス湾 (Bahia de Todos os Santos) の眺望を堪能し、下町 (Cidade baixa) にある民芸品市場 (Mercado Modelo) の品数を見て当地の観光産業の大きさを肌で知った後は、植民地時代を彷彿させる旧市街の至るところにある教会や大聖堂などの名所を見て回った。



植民地時代を思わせる街並みのサルヴァドール



国際展示会パンフレット（国立アフロ・ブラジル文化博物館にて）

* * * * *

しかしそうした史跡めぐりや散策のなかで、私に「ブラジルのネグリチュード」を印象づけたのが、国立アフロ・ブラジル文化博物館（Museu Nacional da Cultura Afro-Brasileira）で行なわれていた国際展示会だった。「ベニン - いまなお彼方で息づく地 - ルーツと今（Benin - Está vivo ainda lá - ancestralidade e contemporaneidade）」と題するその展示会は、1年後の本格開催を目指して、準備・展示を同時に進めていた。しかし私は正直、この時、「彼の地」である「ベニン」が一体何を意味するのか、それがバイーアさらには「ブラジルのネグリチュード」にどのように関わるのか、全く知らないでいた。

ベニンとは12世紀から1897年まで、現在のナイジェリア南部のエド州（州都はベニンシティ）に位置する地域に勃興した「ベニン王国」であり、当時ダオメー（Daomé）と呼ばれた地のことである。15世紀にアフリカ沿岸を航海していたポルトガル人によって、アフリカからブラジルへの奴隷貿易は16世紀にはすでに一大産業へと成長していた。公式にブラジルでの奴隷制が廃止される

のは1888年であるが、16世紀の段階で当時最大の奴隷供給地の一つになっていたのが現在のナイジェリア・エド州南部の海岸地帯であり、18世紀になるとこれがさらに南へシフトし、アンゴラからなどから多くの黒人奴隷が大西洋を横断してブラジルに送られた。アフリカ国内の奴隷の供給地に対して、ブラジルにおける輸入地としてリオ・デジャネイロとしのぎをけずっていたのがバイーア州都サルヴァドルだったのである⁵。

そうした略史的知識も持たないまま、決して規模は大きいとはいえないこの国際イベントに足を踏み入れたのではあるが、館内で案内役のボランティアを務めていたアフロ・ブラジル系の青年が一つひとつの展示品について、丁寧にポルトガル語で説明をしてくれた。そこには、現地アフリカから持ち込

⁵ こうした点につき、概説的には、参照、ボリス・ファウスト（鈴木茂訳）『ブラジル史』（明石書店、2008年）、32頁以下。なお、この著者は、歴史家がアフリカ人を大きく2つの集団 - 西アフリカ、スーダン、ギニア湾北部海岸に多数存在する「スーダン人」と、南部の熱帯地方、ギニア湾岸の一部、コンゴ、アンゴラ、モザンビークなどの「バントゥ人」 - に分けるのが常であるとしつつも、そこで、「ブラジルで奴隷となった黒人は、独自の文化を持つ多様な民族もしくは王国の出身であったことを忘れてはならない」と、ルーツの多様性に注意を喚起する（同書32頁）。

まれた、かつてのベニン王国の神とあがめられた村落の長や指導者たちの衣装や、死者の霊を慰める祭司の仮面、一般の人々の日常生活を垣間見せるきらびやかな色彩の展示品の数々が陳列されていた。案内役の青年の説明で、それらの展示品の多様な色使いや文様の影響が今日のブラジルの伝統や文化の細部に見られることを知った。2階には、ベニン王国の末裔あるいは何らかの関係をもつ内外で活躍の画家たちの奴隷制を批判する作品や、あらゆる使用済みリサイクル商品で作られたという、アフリカからブラジルへの奴隷船と膨大な数の奴隷の模型が展示されていた。そうした奴隷の模型一つひとつに、諦めた様子でおとなしく座っている者、無表情の者、逃げ出そうとする者、殺されようとしている者、泣いている者など、多種多様な表情が刻み込まれていた。私はなおも、半分は展示会の趣旨や目的を解せぬまま、「自分たちのルーツをあらためて探るということは、バイーア／サルヴァドールだからこそできる」という案内役の青年の言葉をかみ締めていた。

ここで、案内役の青年が差し出してくれたこの展示会のパンフレットに掲載されていた一つの文章―「ベニンはいまなお彼方で息づいている―あるいは、ダオメーのいにしえの地へのセンチメンタル・ジャーニー」に目が止まった。そこには、自らのルーツをたどるべく、長年の夢であったベニンの地を踏んだアフロ系ブラジル人の想いが綴られていた。

「私の人生のなかで今回の旅こそ最もセンチメンタルなものではなかった。(ベニン

との) 突然やってきたにぎやかな出会いは、次第に私を釘付けにし、私は見るものすべてに深く感動した。このように、私とベニンとの出会いは私のルーツの一片であり、あらゆるアフロ系ブラジル人の歴史の矛盾に充ちた私の過去との真の遭遇だったのである」(写真の **Emanoel Araujo** 氏の文章より。強調は川畑)

自らのルーツを訪ね歩き、それを見つけ出し、それに直接触れるという経験をもたない私は、ベニンに「故国」ブラジルで自分を育ててきた伝統や文化の多くを見出した感動を詩的に綴る彼の想いを、深層のところで受け止め理解することはできないのだろうと思う。しかし「歴史の矛盾」を「客観的に見る」という立ち位置からならば、それは私にも可能であるだろうと考えた。



Emanoel Araujo 氏の文章

* * * * *

私自身は、こうしたアフリカへの「還流」ともいえる文化的試みの実際の規模については把握していない。しかし植民地開始から500年以上、ブラジル独立から約200年経った現在、かつてアフリカからブラジル（南アメリカ）への人の移動によって織り成された歴史が、再びこの2つの大陸の間で、しかし今度は逆向きのベクトルで起こりつつある。まさにその「文化交流」の實際を目の当たりにして、我々が今日「当たり前」のように考えている「国境（くにぎかい）」について、その「強さ」と「脆さ」を次のように考えさせられた——「国民国家」の壁は時としてある特定の人々の集団たる「国民」を防御するものとして強く作用するが、しかしどれほど「国民」という法・政治的紐帯を人為的に作り出そうとしても、人間にはそこにはとどまれない内的エネルギーが潜んでおり、そうしたダイナミズムに「国境」の壁は「脆い」のではないか。

そうした「国家」を境目にして生じる人間のダイナミズムの二面性を自覚しつつ、しかしなおブラジルという「国家と社会」のありように執着して見れば、そこには「ネグリチュード」を「ブラジルの (brasileira)」として含み込む社会の「寛容さ」を見て取ることができるだろう。さらにいえば、ブラジル社会そのものが「国境」を隔てて生じる内外に向けたベクトルの微妙な均衡の上に成り立っていると見ることも可能なのかもしれない。このことはブラジルのみならずラテンアメリカ諸国、あるいは旧植民地であった地域

においてそうであったように、一方が他を屈服させるという「植民地」そのものの歴史の捉え方に対して重要な示唆を与える。100年だろうと500年であろうと、時間の流れは「同じ人間」の間で起こった服従の過去を消し去るものではないのであり、それは単なるルサンチマンとして片づけることができないほど、人間の愛憎の双方を含む複合的歴史として捉えられなければならないように思う。

この国際展示会のサブタイトルとしてつけられている「ルーツと今」の含意は、「アフロ系ブラジル人」としての現在 (contemporaneidade) である「今」をきちんと定位するために、「ベニン」という先祖返り (ancestralidade) すなわち「ルーツ探し」が必要なのだという、まさに今をよりよく認識するためのものとして過去を探ることの意味があるのだ、ということを見せてくれる。ラテンアメリカの植民地史には、一見当たり前に見えるこうした歴史認識の重みが数多く含まれている。

* * * * *

さて、話を冒頭の旋律の「主 - 副」に戻そう。ブラジルに滞在するたびに感じる「ブラジルのネグリチュード」に彩られた「ブラジルの人種の坩堝」ではあるが、ブラジル国内の「アフロ・ブラジル人」の「ルーツ」をさかのぼることによって「今」の地点を捉え直すようとする動きを目の当たりにして、私はふと、私にとっての「主旋律」であるペルーのアマゾン地方バグアで、2009年6月に勃発した先住民と政府との衝突事件が脳裏に浮

かんだ⁶。

この事件の背景には、ペルーのフジモリ政権（1990年～2000年）下で徹底的に採用された「新自由主義路線」の下での市場開放、民営化、外資誘致などの多岐にわたる社会経済政策がある。イデオロギイ的立場は異なるにせよ、2001年からのトレド政権、続く2006年からのガルシア現政権も、こうした路線を継承した。フジモリ政権からトレド政権下で、すでにペルーが産出する多くの地下資源に対して外資が導入されており、この事例は、2009年6月にガルシア現政権がアマゾン流域の地下資源をアメリカとの自由貿易協定締結の対象としたことに端を発するものであった。

土地を自文化のアイデンティティと見る先住民族にとって、その下に眠る地下資源は土地と同じ重要さをもつものであり、ペルーの先住民団体は、ペルー国家といえども、それを無条件に発掘・開発する権限はないと、この自由貿易協定へ強く反対していた。対するペルー政府は経済発展のためにはこうした経済政策は不可欠とする立場をとった。そして先住民族の運動を支援し擁護したのが、先進諸国の NGO であった⁷。

⁶ この事件については、ペルーの開発促進研究所 (DESCO-Centro de Estudios y Promoción del Desarrollo) が発行する季刊誌 *Quehacer*, N°174, Lima, 2009 が、「セルバが現れた (Se salió la selva)」と題して組んだ特集記事が興味深い。

⁷ しかし、20世紀初頭、この地域における天然ゴムの大量伐採によって経済的繁栄を築き上げたのもまた先進諸国だったのであり、ここには、自分たちの都合で近代化させておきながら、今度もまた自分たちの目線で、先住民を「接触なき民

(pueblos no contactados)」として、その文化を擁護する矛盾した態度がある。ここに見られるのは、徹頭徹尾、低開発国に対する先進国からの目線である。この点に関わり、前掲注 (6) の特集の

ここでブラジルとペルーの事例を単純に比較して、何か学問的結論を引き出そうというのではない。比較文化的考察を可能とするあらゆる条件をあらかじめ提示しない限り、単純なあれこれの比較は、せいぜいのところ、一方を過分に評価し他方を過小評価する毀誉褒貶的な結果に墮するだけである。わずかにフィールドノートに過ぎない本稿において、本格的な比較文化的検討に立ち入るだけの余裕はないが、サルヴァドールでの滞在を経て、私がどうしても気になった以下の点のみを指摘しておきたい。

ブラジルの「ネグリチュード」とペルーの「インディオ／インディヘナ (indígena)」の2つの事例が映し出す「今」をめぐるコントラストは、「植民地支配」という歴史的事実の捉え方の複雑さと難しさを浮き彫りにする。単純な分類をしておくならば、一方は「人種」概念を主体とする集団であり、他方は「民族」を基盤としているとさしあたりはいえるだろうが、ブラジルの黒人は「異国の地」で、ペルーの先住民は「故国の地」で、それぞれ「他者による屈服」の歴史を背負わされてきた。ブラジルが1822年に、ペルーが1821年に、それぞれポルトガルとスペインという異なる宗主国からの独立を達成し、「ブラジル」と「ペルー」という「一つの国民」の擬制の下に国家建設を行なっていく。

ここで何らかの問題を探り当てようとするれば、それは、近代の産物である「国民国家」の形成過程に行き着くことになるだろう。ブラジルは支配者と被支配者間の人種混交を経なが

なかで、ペルー人記者がイギリスの NGO 団体の代表に対して行なったインタビュー記事がこの点を鋭く突いており、興味深い (DESCO, *Quehacer*, N°174, Lima, 2009, pp70-75)。

ら、内部に数知れない文化的多様性を抱えつつも、概して一つの連邦共和国としての単位をつくりあげてきた。そこからは、「一つの単位」を維持するだけの「融和」と「寛容」が社会のなかに存在してきたことが窺える。ペルーとて「混血の進展」という意味では類似の社会構造の変容が起こってきたが、しかし例えば、バグアの事例が示すのは、「我々ペルー人は」という先住民の意識ではなく、「ペルー国家といえども」、「我々に対して」という「自国」への他者的態度なのである。

混血の進展や社会的流動性の拡大によって、今後こうしたペルー社会の状況が変化していく可能性は否定できないが⁸、少なくともブラジル社会における「ブラジルのネグリチュード」がブラジル社会で「一体」として感じられるほどの認知度を、ペルー社会における先住民が獲得しえているとはいえないだろう。

それらの違いはいかなる構造的要因によるものなのか、どのようにしてそうした「社会的融和」は生じうるのか、「ペルー国民性(peruanidad)とは何か」ということが、学問的にも実際にも歴史的課題であり続けているペルーの「今」において、明快な解答を見つけ出すことは容易ではない。「ペルー共和国



パイアーナと筆者（右は同行した上川通夫教授）

(*República del Perú*)」という国家理念とは裏腹に、ラテン語の語源が示す「公のことがら(*res publica*)」という意味での「共和国」をつくるプロジェクトは、なお未完だといわねばならない。

私のサルヴァドールへの旅は初めてであり、そこでの滞在はあまりにも短すぎた。しかし、やはり私の問題関心のなかの「副旋律」としてのブラジルは、相変わらず「主旋律」に重要な刺激を与え続けている。その意味で、本文中で引用した **Emanoel Araujo** 氏に倣って言えば、今回の私のサルヴァドールへの旅は、私の人生において最もセンチメンタルなものだったのかも知れない。帰国後2ヶ月たって、あらためて感じることである。

⁸ ペルーでは近年、こうした「混血化=チョロ化(cholificación)」の現象を論じる研究が増えつつある。